

令和4年度入学試験問題（前期日程）

小 論 文

（中等教育教員養成課程）

注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること。
2. 解答紙には、かならず受験番号を記入すること。

〔問〕 つぎの文章は、執筆当時、声楽家であり、中学校教諭でもあった、中村昌子氏によるものである。これを読み、あとの問いに答えなさい。

個人的には、一糸乱れぬクラス合唱というものは、危険を感じて好きになれない。人間の歌声は、顔かたちと同じようにすべて異なり、もっとも快く声の出る高さや、声の質など、まさに千差万別である。それなのに、合唱の際には、他の人と違うことは、なににもまして許されないことになる。彼らの活動のなかでも「〇〇さんの声が目立って困るので、もっと小さい声にして、みんなに迷惑をかけないようにしてください」という発言がくりかえされる。言われた子どもは真っ赤になり、自分の声が「目立つ声」であることを呪い、それ以後二度と大きな声でのびのびと歌ってくれなくなる。こういう場面を目にするたびに、本当に胸のつぶれる思いがする。その子の声が生まれながらにしてもつ音色を、自由に歌う喜びを、否定して奪いとる権利がだれにあるというのだ。

ところが、中学生たちは、厳格なまでに、パートをつくる同じ色の部品になることをめざして、ひたすら個性を殺すことを要求しあうのである。このことは、「個」ではなく「集団」を重視する日本の社会を反映して、教師側も同じ轍を踏んでいる。典型的なのが「あのクラスは〇〇だ」という言い方で、「△△君は変わっている」「クラスから浮いている」「何組はよくまとまっているので、授業がしやすい」などの発言がなんの疑問もなく交わされる。これが「この学年は」となり、「この学校は」となって、いわゆる人気校や受験生の集中する学校を生み出している思想となる。同じ学校のなかにいれば、なにかがみんなと「同じ」ことを保証され、そのために「同じ」になる努力を惜しまない。しかし、生まれつき違う人間が、どうすると「同じ」になりうるのだろうか。これは、一人ひとり違う「個」としてしか人を認識しない国では起こりえない現象である。

私がヨーロッパで歌っていたとき、現地の合唱団と共演する機会にたびたび恵まれたが、その合唱は日本のそれとまったく違っていった。オーケストラでも同じことを感じた。私の感じでは、ある色の声、たとえば「緑色の声」を合唱のパートで出したいと思ったら、日本では指揮者がその色を示し、メンバー全員が大変誠実な努力をして

一人ひとりが限りなくその色に近い声を創り、パートの色の色を創り上げていくように感じる。聴くほうも、「たいへんによく揃っている」「きれいだ」と好感をもって聴くことが多い。

これに対してヨーロッパでは、近くで聴くと、それはもうばらばらなような声で歌っている。そして一人ひとりのもっている声の色合い——ある人は黄色がかった声、ある人は青みがかった声、またある人はとても薄い色の声……——をけっして変えない。それなのに、離れて聴いてみると、それらの色は混ざりあい、結果として、めざした「緑色の声」になっているのだ。そして、この声はじつに暖かく、やわらかく、心にしみた。はじめてあの合唱の音色を、じかにこの耳で身体で受けとめたときの感動は今も忘れられない。

このことは、音楽の現象としてのみ起こることではなく、いわばそれぞれがもつ根本的な価値観と切りはなすことのできない、根深いものであろう。

さて、中学生の合唱の話に戻ろう。じつは、前述のヨーロッパ式合唱を試そうと、「一人ひとりが自由に声を出せれば、目立つ人がいてもいいではないか」と、授業で働きかけてみたことがある。ところが、これは生徒たちに受け入れてもらえなかった。彼ら自身の自己評価が「きたない」「ばらばらで、まとまりがない」「聴いてて、そろってなくて気持ち悪い」等々、たいへん評判が悪かった。彼らも、(校内合唱コンクールに…引用者注) 参加するからには優勝したい。そのためには、票を得なくては話にならないのである。せっかくのチャンスだからと、私が①新しい価値観を紹介しても、それが「票」すなわち「評価」に直接結びつかないとすると、退けられてしまうのだ。

他人と違^{ひと}うことにたいへん抵抗を感じ、他人と違う表現をすることをいやがる生徒たち。まだ10歳あまりの子どもなのに、その「場」の雰囲気^{ひと}を敏感に感じとり、瞬時に「場」の動向をつかみ、それに合わせた言動をとろうとする。いや、とれてしまうのだ。そして、②自分の独自の考えを素直に言う子どもがたまに出ると、まさに③「場をわきまえない愚か者」として、「わかっている」多数のものが強烈に制裁を下す。まさに、日本の大人の社会の縮図である。私は授業で「すべての人が違うのが基本であり、だからこそ他人や自分のよいところを見つけられる力、そしてそれを誰かのまねでない自分自身の言葉で表わすことが大切」とくりかえし言っている。どれ

ほどの生徒が意図を理解してくれるか、いや理解はしてくれるかもしれないが、実践してくれるか。

若い彼らと毎日過ごすなかで、希望と失望をくりかえしながら、それでも地道に唱えつづけていきたいと思っている。

出典：中村昌子「歌う歓びと楽しみを探る」

(佐伯 胖 他編『表現者として育つ』東京大学出版会，1995年，pp. 48-51)

(設問の都合により本文の一部を改変している)

(問1) 下線部①「新しい価値観」とは、具体的にはどのような点が、中学生にとって「新しい」のか。中学生がもっている価値観と対比して、90字以上120字以内で説明しなさい。

(問2) 下線部②のような生徒に対して、下線部③のような反応が起こる理由について、あなたの考えを述べ(経験や主観を根拠にしてよい)、もし下線部③のようなことが起きそうな時、あなたは、下線部③「多数のもの」へ、どのようなメッセージを發しますか。300字以上400字以内で具体的に答えなさい。その際、後半であなたが述べる「メッセージ」が、前半であなたが考えた「理由」をふまえた、説得力をもつものになるようにしなさい。

(補足説明：合唱以外の状況を想定して述べてもかまいません。)